研究ノート

実習指導者と共につくりあげる魅力ある介護実習
～シャドーイングを取り入れて～

Attractive Care Internship Created with an Internship Instructor
ーBy Adopting Job Shadowingー

井上　理絵、白井　聡美
INOUE Rie、SHIRAI Satomi

【要約】

介護実習の中で最初に行う実習は、介護が必要な人と介護の現場を見学して理解する基礎的な実習である。学生が実習をとおして介護の仕事に触れ、介護の魅力を感じ取り、興味を持つことができるよう、「シャドーイング」を取り入れた実習を令和 4 年度から実施した。

学生への実習事前指導としてシャドーイングについての講義と、実習に取り入れる意義と内容を説明した。実習指導者には実習全体の説明と講師による具体的な指導方法や対応をふくめたシャドーイングを取り入れた実習についての講義を行い、実習指導者・学生・教員が実習の目的を共通理解して介護実習を行った。取り組んだ結果、介護福祉士の資格取得を目指す学生が 72.0%から 89.7%に増加した。

キーワード　シャドーイング、介護実習、介護の魅力

1.　はじめに

日本介護福祉士会編（2004)『現場に役立つ介護福祉士実習の手引き』には、介護実習は、「理論学習や演習による応用思考の訓練とともに、専門的知識や技術を体験学習の中で統合させていく貴重な場である」と記されている。川延（2019）は、「介護福祉士を目指す個々の学生にとっては、『知っている・解る』といった授業での知識から、『できる』という実行へと次元を超える、異次元をつなぐ架け橋であり、専門職職業人としての未来の自分を思い描く輝かしい将来に向けての架け橋である」としており、介護実習は学生にとって職業人・社会人としての基礎をつくり、将来の自分の姿を見出すことができる大切な期間であることが推測される。そのような貴重な場である介護実習は、2 年間の介護福祉士養成課程において実践の場で 450 時間を行うことが必須要件となっている。これは養成時間 1850 時間の 4 分の 1 を占めている。

しかしながら、介護実習を行った学生の中には、介護実習終了後に自分は介護には向いていないと思い、職業の選択を変更していく学生もいる。

いのうえ　りえ（健康福祉学科）

本学科では、学生が幅広い視野から福祉に関わり、さまざまな資格を取得できるように平成 30 年度より学科のカリキュラムを編成しなおした。1 年次には全員が介護職員初任者研修を修了できるようにし、介護福祉士の資格を取得しなくても介護分野の仕事に就きやすい環境を整えた。それと同時に福祉ビジネス分野のカリキュラムを導入し、医療事務・介護事務資格等が取得できるようにした。

介護実習後に何らかの理由で進路変更を希望する学生の割合は、平成 30 年以降の学生の 11%から 20%である。介護実習は 2 年間で 4 回実施していたが（図 1 参照）、1 年時の 2 月にある介護計画実習後には進路変更がみられないことから、1 年次 8 月に実施している基礎実習が影響している可能性が高いと考えられる。

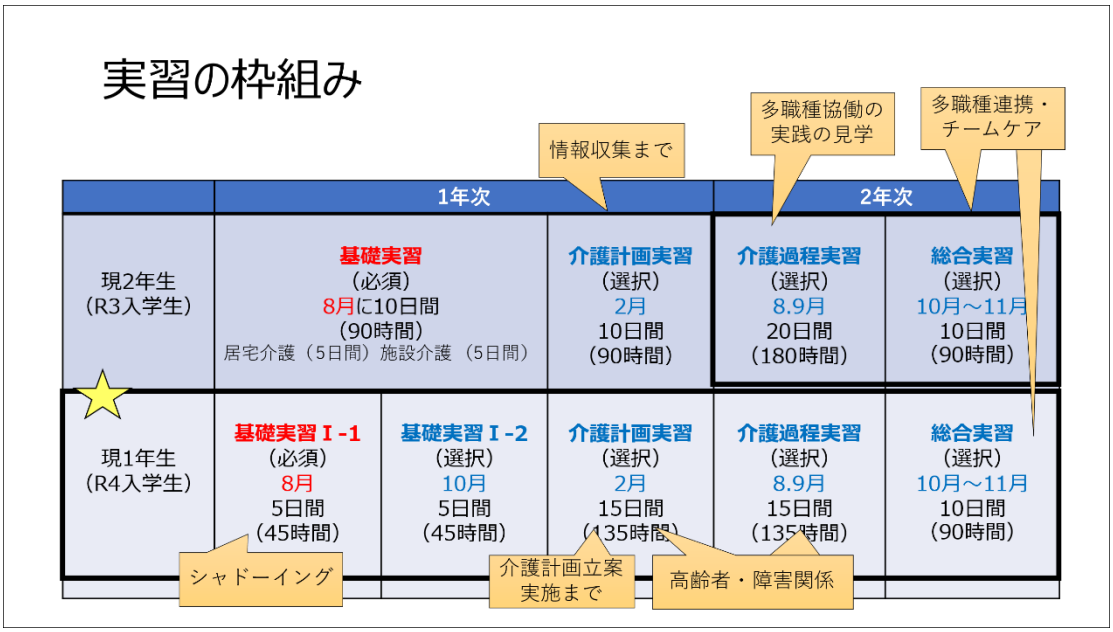

図 1　介護実習の枠組み

介護人材確保が喫緊の課題となっている今日、介護福祉士資格取得を目指す学生は全員が基礎実習後もそのまま介護福祉士資格取得を目指すことは当然のこととして、福祉ビジネス分野の資格を目指す学生の中でも、介護の魅力を知って、介護の仕事を応援する良き理解者となってもらうことが必要であると考えられる。

そこで、介護福祉士養成課程の変更にも合わせて、学科内で介護実習全体の開催時期、日数、内容を見直した。特に基礎実習においては、介護福祉職をとおして介護が必要な人や介護の現場を見学して理解する基礎的な実習であり、介護の仕事の魅力や奥深さを知り、仕事のイメージを獲得することができるように実習時期を 2 段階に分け実施することとした（図 1 参照）。

また、本学科では富山県からの委託事業である令和 3 年度介護実習連携強化応援事業において、介護実習における実習評価基準を見直し、段階的な学修能力に活かすことと、介護実習リーダーを育成することを目的とする検討会を開催した。検討会のメンバーは本学科の介護実習施設・事業所の分野別に選出した指導者 9 名である。検討内容は、実習をとおして、

「介護って辛そう」「介護を仕事にしたくない」ではなく、「介護職をしてみたい」「介護福祉士をめざしたい」という学習意欲の土台ができるようにするためにはどのようにすればよいかとし、4 回にわたって検討した（表 1、図 2、図 3 参照）。

表 1　検討会日程と内容

	日時	内容
第 1 回	令和 4 年 1 月 28 日（金） 18 時～19 時	1．検討会の趣旨・目的 2．基礎実習に関する意見交換
第 2 回	令和 4 年 2 月 10 日（木） 18 時～19 時	1．基礎実習Ⅰ－1 に関する意見交換
第 3 回	令和 4 年 3 月 4 日（金） 18 時～19 時	1．基礎実習Ⅰ－1 の目的と具体的内容
第 4 回	令和 4 年 3 月 15 日（火） 18 時～19 時	1．基礎実習Ⅰ－1、Ⅰ－2 の目標の確認

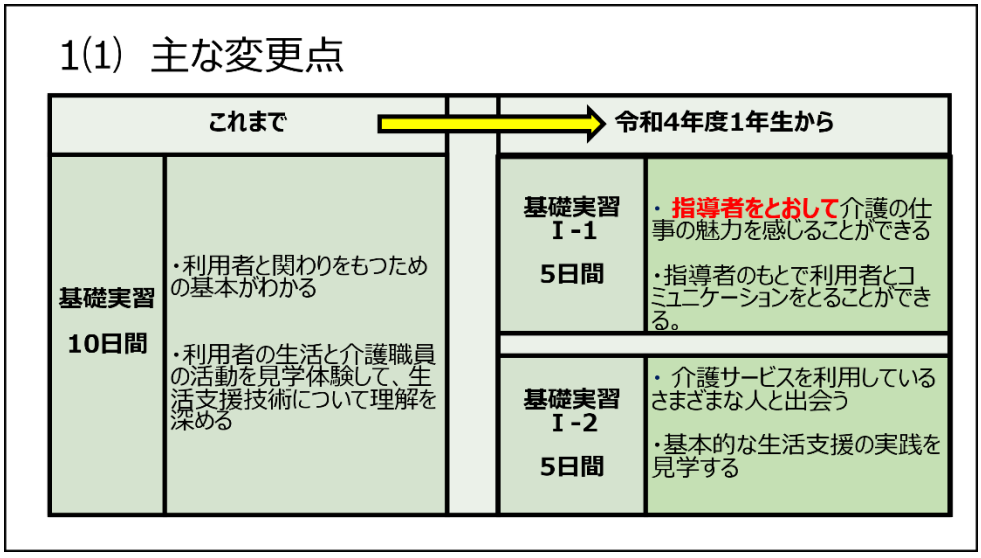

図 2　基礎実習の変更点

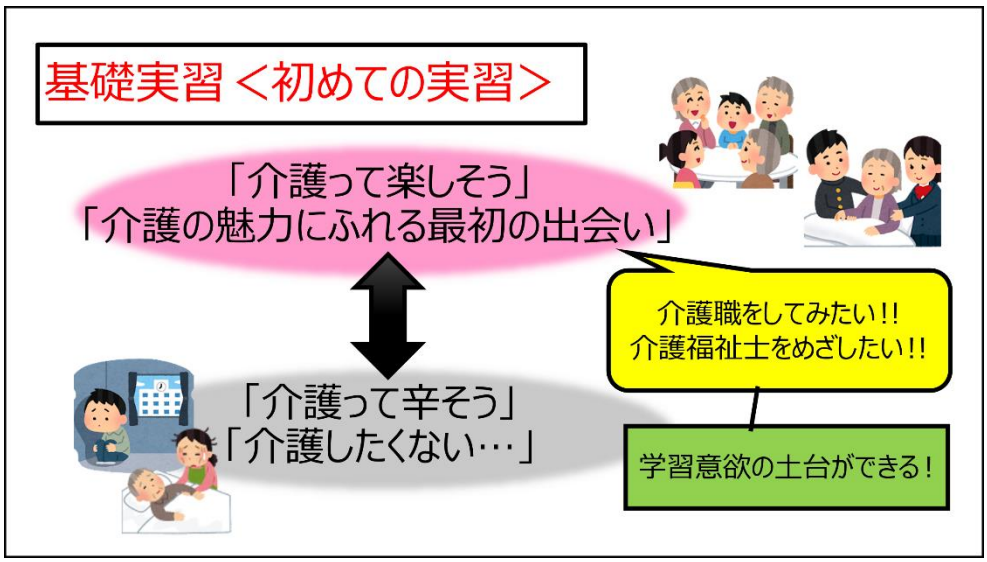

図 3　基礎実習に求めるもの

第 2 回の検討会では基礎実習に対する「不安」を持つ学生を理解し、「(介護の魅力を) 教えよう」から「(介護の魅力を) 伝えよう」へ指導者のもつ実習指導のイメージを変容することで意見がまとまった。第 3 回の検討会では、看護教育の実習で行われている「シャドーイング」を用いて基礎実習Ⅰ-1 に取り組む提案があり、検討を続けた。その結果、令和 4 年度から「シャドーイングを用いた介護実習」を基礎実習Ⅰ-1 に取り入れることとなった。

2. 目的

シャドーイングを取り入れた実習で得た学生及び実習指導者の気づきを分析し、今後の実習指導のための基礎資料とする。

3. 用語の定義

本研究では、「シャドーイング」「気づき」について次のように定義した。

シャドーイング：実習指導者などのお手本となる人（ロールモデル）の後ろを「影」のように密着して行動し、介護の実際を間近で説明を受け、見学すること。

気づき：自分からふと感じ取り考えつくこと、思いがそこに至ること、意見。

4. 研究方法

(1) 対象者

A 短期大学 B 学科

基礎実習Ⅰ-1 を履修した令和 4 年度の 1 年生 29 名

基礎実習Ⅰ-1 の実習施設・事業所の指導者　15 名

(2) シャドーイングの研修

学生には、実習の事前指導にシャドーイングの講義を行い、実習に取り入れる意義と内容を説明し、実習初日には学内実習でロールプレイと記録方法（観察学習シート）の演習を行う。

実習指導者には、実習全体の説明と講師による具体的な指導方法や対応を含めた「シャドーイングを取り入れた実習」についての講義を行う。

(3) シャドーイングの実施状況の把握

①学生には日々の記録に加え、観察学習シートを記入してもらう。

②学生の日々の記録、観察学習シートや指導者のコメント等を質的に分析する。

5. 倫理的配慮

富山短期大学倫理委員会にて審査を受け、承認を得た。(承認番号：R4-31)

6. 結果

(1) 基礎実習Ⅰ-1 の概要

①期　　間：令和 4 年 8 月 22 日（月）～9 月 6 日（火）のうち 5 日間（45 時間　1 単位）
※コロナの影響のため

②配属学生：A 短期大学 B 学科　令和 4 年度 1 年生 29 名

③配属施設：特別養護老人ホーム　5 カ所
小規模多機能型事業所　2 カ所
認知症対応型共同生活介護　1 カ所
多機能型事業所　1 カ所
通所介護　5 カ所
地域密着型通所介護　1 カ所

④実習目標・到達目標

基礎実習Ⅰ-1 における目標と到達目標を表 2 にまとめた。

表 2　基礎実習Ⅰ-1　目標・到達目標

目　標	1. 指導者をとおして介護の仕事の魅力を感じることができる。 2. 指導者のもとで利用者とコミュニケーションをとることができる。
到達目標	1. 観察をとおして、利用者がどのようにサービスを利用しているか理解することができる。 ① 指導者の支援に対する利用者の反応を表現することができる。 ② 利用者同士の関わりを表現することができる。
	2. 観察をとおして、指導者がどのように利用者と関わっているか理解することができる。 ① 指導者がどのようなコミュニケーション技術をとっているか表現することができる。 ② 指導者がどのように生活支援技術を行っているか表現することができる。
	3. 指導者のもとで利用者とコミュニケーションをとることができる。
	4. 介護職の仕事の内容と働く場を理解する。
	5. 介護福祉職における感染予防について観察することができる。
実習形態	・原則として施設・事業所における通常の日勤のみとする。 ・シャドーイングを用いた実習を行う。

⑤実習プログラム

実習プログラム（実習の流れ）は事前、事後を含めて表 3 にまとめた。

表 3　基礎実習Ⅰ-1 プログラム

事前	1. Zoom にて指導者と打ち合わせをする。 2. 施設の特色・理念、利用者の状況、職員の状況等の説明を受ける。 3. 実習目標の見直しと施設への送付。
1 日目	1. 自分で健康管理ができるよう、抗原検査の方法を取得する。 2. 移乗支援介護ロボットについて体験し、理解を深める。 3. 翌日からの心構えを醸成する。
2 日目 ～4 日目	1. 施設および学校で定められた感染対策をとって、施設に入る。 2. 施設長および施設職員に自己紹介をする。 3. 申し送りに参加する。 4. 「今日の実習目標」を発表し、実習指導者または担当職員と行動予定を確認する。 5. 施設のオリエンテーションを受ける。 6. 担当職員に同行する。 7. 担当職員とミニカンファレンスをする。 8. 記録と報告をする。 9. 同行して見学した項目を経験録に記入し、指導者の確認を得る。 10. 施設および学校で定められた感染対策をとって、帰宅する。
5 日目	1.～10.前日までと同様 実習のまとめ
〈実習終了後〉 A-1.2 表、B 表（日々の記録）、観察学習シート、自己評価表、お礼状等 全ての記録類を確認し、提出用ファイルに綴じて提出の準備をする。	

実習の初日は、新型コロナウイルス第 7 波で感染が拡大し、実習施設でもクラスターが多く発生し変更を余儀なくされていたことから、施設の要望もあり感染予防を徹底するため学内実習とした。（表 4 参照）。

表 4　学内実習プログラム

時間	内　容
登校時	感染予防対策（手洗い、マスク交換、検温、消毒）
8:30～ 9:00	出席確認、健康チェック、本日の流れ説明等
9:00～10:30	実習①「健康管理について」～感染予防と抗原検査方法の取得～ 講師:本学非常勤講師
10:40～12:10	演習　「シャドーイング」ロールプレイ
12:10～13:10	昼休憩
13:10～14:40	実習②「福祉用具・介護ロボット体験」 講師:特別養護老人ホームＣ苑　腰痛予防プロジェクトチーム
14:40～14:50	休憩
14:50～16:00	実習②「福祉用具・介護ロボット体験」 講師:特別養護老人ホームＣ苑　腰痛予防プロジェクトチーム
16:00～16:10	休憩
16:10～17:00	記録
17:00～17:30	本日のまとめ・確認　学内実習終了

（2）シャドーイングの実習事前研修

①学生へのシャドーイング指導の実際

ア．　開催日時：1 回目　令和 4 年 8 月 1 日（月）　9:10～10:40

2 回目　令和 4 年 8 月 22 日（月）10:40～12:10

イ．　開催形式：1 回目、2 回目共に対面形式

ウ．　参加人数：基礎実習Ⅰ-1 を履修した令和 4 年度の 1 年生 29 名

エ．　研修内容

a .1 回目　看護学校での教育経験のある共同研究者の白井が、スライドを用いてシャドーイングの意義と実習での実施ポイントの説明を行った（図 4 参照）。

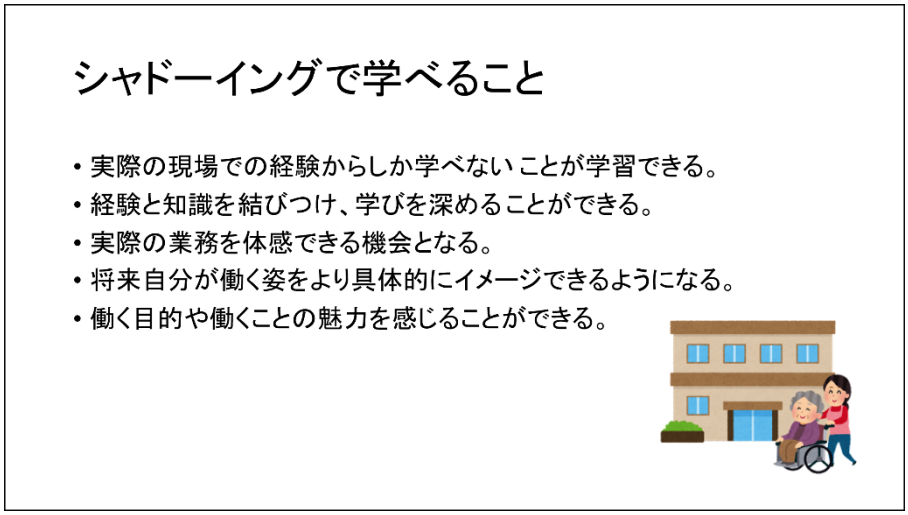

図 4　シャドーイングで学べること（2022. 白井作成）

b. 2 回目　シャドーイングに参加する学生の心構えの講義（図 5 参照）と、コミュニケーション技術担当教員と実習助手がロールプレイの演習を行った。

シャドーイングに参加する学生の心構え

1. 何を学ぶのか、目標をもって同行する。
   ・実習指導者や担当職員に本日の実習目標を伝える。
2. できるだけ担当職員のそばで見学する。
   ・ミーティング、ケア（準備や後片付けを含む）、多職種連携、記録、利用者とのコミュニケーション場面など、可能な限り同行する。
   ・利用者が拒否する場合、職員の休憩等の際は同行せず、待機方法や場所を確認し、合流する。
3. ミニカンファレンスなどで、同行し考えたことや感じたこと、同行中の気づきや質問について話す。
4. 同行時に関わる利用者や職員に挨拶する。
5. 利用者への生活支援技術は実施しない。
6. 同行中、利用者へのケアやコミュニケーション場面でのメモはしない。
7. 感染予防のため、1 行為 1 手洗い（もしくは手指消毒）を行う。

図 5　シャドーイングに参加する学生の心構え

②実習指導者への研修

ア．開催日時：令和 4 年 8 月 5 日（金）　10:00～11:30

イ．開催形式：zoom 開催

ウ．参加人数：17 人

エ．研修内容

a．令和 4 年度介護実習の主な変更点

1 年生が初めて行う介護実習「基礎実習」は令和 4 年度入学生までは、8 月に 10 日間実施していた。この実習を、「基礎実習Ⅰ-1」5 日間（8 月）と「基礎実習Ⅰ-2」5 日間（10 月）の 2 回に分け、特に「基礎実習Ⅰ-1」では、実習指導者をとおして「介護職をしてみたい」「介護福祉士を目指したい」という学習意欲の土台ができるようシャドーイングを取り入れた観察実習を行うことを図 3.図 4（P2）を示して説明した。

b．介護実習の指導ポイント

介護実習に関する基本的な考え方を見直し、日本作業療法士協会の「作業療法臨床実習の手引き（2022)」を参考にし、「見学レベル」「模倣レベル」「実施レベル」の順番に実習を進めていくこととした（表 5 参照)。この「見学レベル」には、シャドーイングの考え方が含まれる。

表 5　介護実習指導のポイント

レベル	指導のポイント
見学レベル	・事前に視点を伝え、介助を実演する。 ・目的、方法、内容を伝える。 ・口頭での質問を行い、理解度を確認する。
↓ ⇡	
模倣レベル	・介助内容およびリスクを事前に確認し、補足する。 ・その時にその場で指導をしながら実際に行う。 ・徐々に指導を減らす。 ・学生の到達度を聞く。 ・良かった点を伝える。 ・改善点を伝える。
↓ ⇡	
実施レベル	・介助内容およびリスクを事前に確認する。 ・指導者が監督するなかで実際に行う。 ・可能となった技能から手を引く。 ・学生の到達度を聞く。 ・良かった点を伝える。 ・改善点を伝える。
※ ◀┅ 学生の到達度によりレベルを下げて再指導する	

c．シャドーイングについての講義

共同研究者の白井が「シャドーイングを取り入れた実習について」をテーマに講義を行った。

「シャドーイング」とは、自分では直接経験せずに他者の行動を観察することで行動が変化する観察学習である（図 6)。

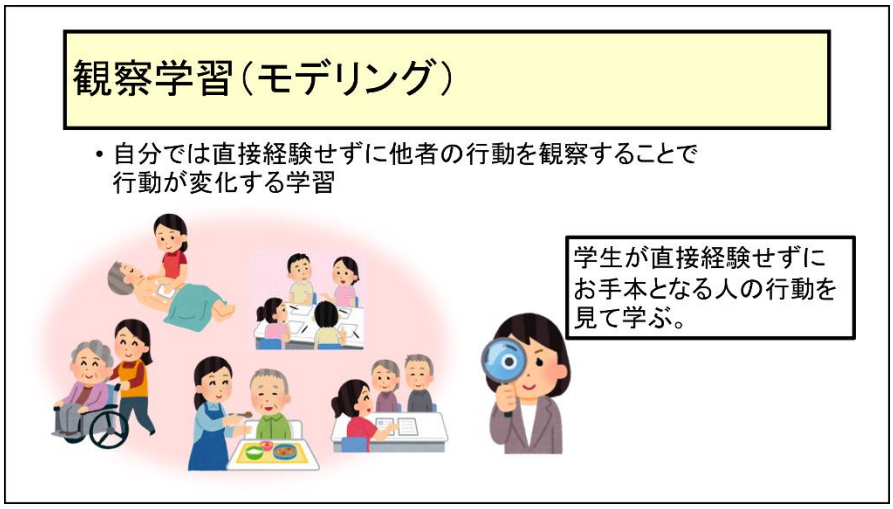

図 6　観察学習（2022. 白井作成）

実践の場としては、ジョブシャドーイングや医学生・看護学生の実習がある。シャドーイングによって得られる効果とは、学生には、「実際の現場での経験からしか学べないことが学習できる」「経験と知識を結びつけ、学びを深めることができる」「実際の業務を体感できる機会」「将来自分が働く姿を具体的にイメージできるようになる」「働く目的や働くことの魅力を感じ取ることができる」「職業への関心が高まる」がある。また指導者に対しては「改めて仕事の意味や意義に気づく機会となる」「日頃関わりのない人から尋ねられることでこれまで言葉にしてこなかった経験や知識、考えに気づく機会になる」などの効果がある（図 7)。

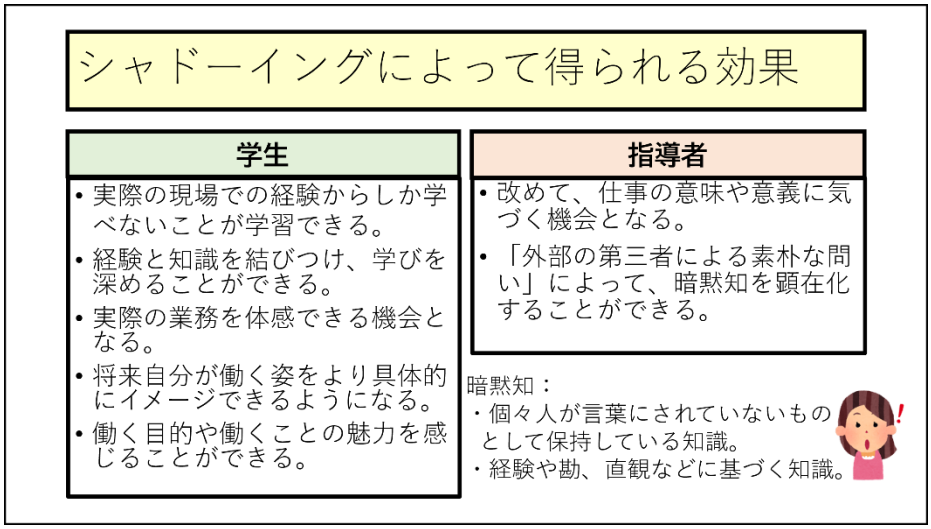

図 7　シャドーイングから得られる効果（2022. 白井作成）

シャドーイングを実施する際のポイントは、「シャドーイングで何を学ぶのか、目的や

目標を共有する」「学生に今からすることを簡単に説明する」「できるだけロールモデルのすぐそばでみせる」「学生がその日に見たことや学びを振り返る時間を作り共有する」ことの 4 点である（図 8)。

シャドーイングを用いることで、「言葉にすること」や「語ること」が増え、指導者自身が大切にしていることに気づく機会になり、学生の素朴な問いにはっと気づかされることもある。また、学生は現場の生の声にワクワク・ドキドキし、めざす介護福祉士像を描くことに繋がる。結果として、シャドーイングを取り入れた実習を活用することで、介護の魅力ややりがいを伝えることができる（図 9)。

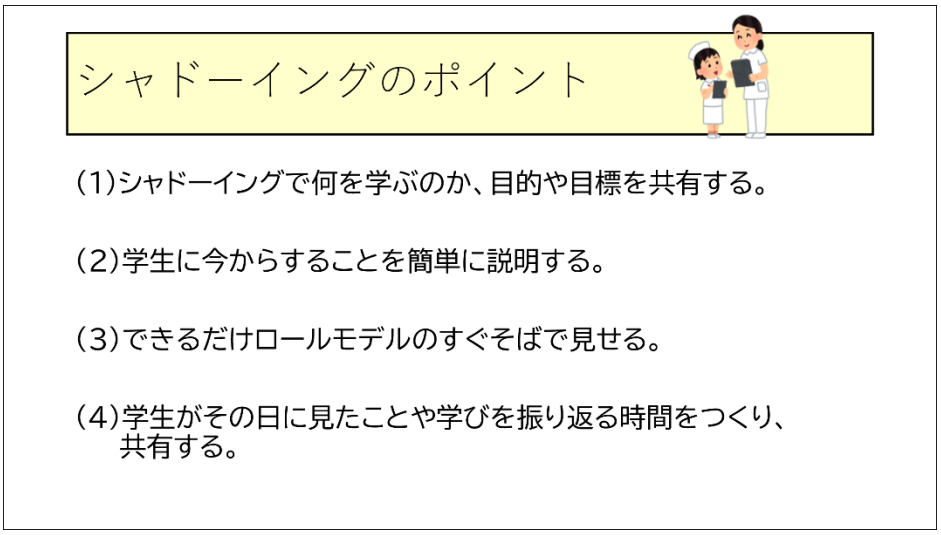

図 8　シャドーイングのポイント（2022. 白井作成）

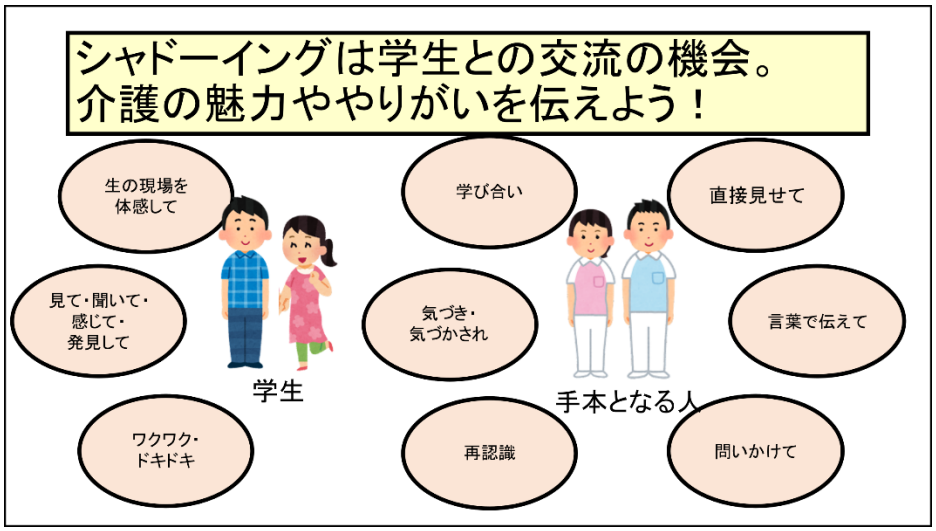

図 9　シャドーイングから得られること（2022. 白井作成）

研修会不参加の実習施設へは資料を事前に送付し、電話または施設出向き直接説明を行った。

⑤シャドーイング講義後の指導者の感想

研修後の感想をまとめた。

・シャドーイングを取り入れるのは初めてだが、どういう視点で技術を展開しているのか実習生に見てもらいたいと思う。 ・ロールモデルに適切かどうか少し不安もあるが、見ることを目標にしていることを認識しながら指導していきたい。 ・常に利用者に見られている仕事であるが、学生も目的をもって見ているということで気を引き締め、モデル職員と他の職員にも伝えて実習をしていきたい。 ・高齢者だけでなく、障害者もいる雰囲気を分かってもらえるように、まずはコミュニケーションを理解していくことから行っていきたい。 ・観察実習であるシャドーイングの目的を担当職員と共有し、実習生が介護の魅力を感じ取ってもらえるようにしていきたい。 ・「介護職をしたい」と思ってもらえるように実習指導担当者と行っていきたい。 ・今回の講義を聴き、施設で工夫して他の職員にもシャドーイングの研修を行って実習に臨みたい。

（3）実習後の学生の気づき

基礎実習Ⅰ-1 の日々の記録、観察学習シートから、シャドーイングに関する記述を一部抜粋した。

・施設の中でも家のように生活をすることを大切にしていて、利用者の気持ちや意見を尊重していた。一人ひとりに丁寧に話をしたり、接していて、楽しいことばかりではないが、「ありがとう」と言われると嬉しい気持ちになった。
・指導者の動きを観察することと声かけを意識して聞くことを心がけた。どのような場面でも常に利用者に目を配り、サポートしている姿が印象に残った。
・歩行介助の際に転倒する危険がないように周囲をよく見ながら、「1、2、3」「1、2、3」と声をかけながら行っていた。
・利用者の方が安全に過ごすことができるように動いていた。例えば、送迎の場面では、利用者の方の体調を車中でも確認していたり、少しの段差でも衝撃を感じないように車いすを浮かせたり、車での乗降の時には、ゆっくりとしたスピートで周囲を確認しながら行っていた。
・指導者がコミュニケーションを行う時に、利用者の肩や足に触れながら行うと利用者が嬉しそうにされていた。
・指導者が耳が聞こえにくい利用者に近づき、笑顔で顔を見てから耳元で声をかけると利用者も笑顔になった。

・自立支援を意識して介助されていることがわかった。例えば、靴下は向きだけを教えることで利用者が自分で履くことができ、利用者の方のできることをなくさないようにしていることがわかった。
・おやつ介助の際、なかなか食べてくれない利用者の方に「甘くておいしいですよ」「〇〇さんの為に用意しました」と声かけをしながら口元まで運ぶと利用者は自分で箸を持ち換えて食べていた。
・服薬の際には、ゼリーに混ぜるなど一人ひとりに合わせた最適な方法を実施していた。必ず飲み終わった後は口の中を目で確認するなど細かなところまで気を遣っていることがわかった。
・足が冷え気味の方にはクッションや毛布で覆ったり、常温の水を入れたペットボトルを足元に挟む等
・介護の仕事は様々な業務があることを改めて感じた。入浴介助、排泄介助、食事介助、口腔ケアなど授業で習っただけではイメージができなかったことも、見学、説明を受けることでとても参考になった。利用者の方が安心できるように声かけをすることが大事なことだと感じた。
・自分から利用者に話しかけに行けなかったが、職員の方から説明・見学、助言を受けたことで利用者の方に自分からコミュニケーションをとりに行くことができた。

（4）実習後のシャドーイングを担当した指導者のコメント

実習評価表等に記載されたコメントより、シャドーイングに関するものを抜粋した。

・職員の動きをよく観察し、コミュニケーションの際の声のかけ方、表情などをうまく参考にし、利用者様と会話をする姿が見られました。 ・職員の行動や動きを観察しながら直接的というより同行する形で実習に取り組んでいただきました。職員、そして実習生が共に緊張感を持ち、より傍に居て気づくこと、観察することができたのではないかと思います。 ・指導者や職員をとおして、声かけや関わりの意味、個々に対しての支援の違いを汲み取ることができるようになり、説明して見てほしいポイントや、利用者の反応もしっかりと記録することができていました。 ・1 回 1 回、排泄介助や食事介助などの場面では、その都度何か知りたいことはなかったかなど、細かく確認するように心がけることができた。 ・忘れずに学生の意見を聴くことができた。 ・これまでの実習では、1 日の最後にミニカンファレンスの時に質問の共有などをしていたが、その時に思っていたことを確認することになり、忘れていることもあったのではないか。見た時に感じた疑問などを解決できることが一番良いことかと思う。 ・ミニカンファレンスの時の学生の質問や感想は印象深かったことが多いが、その都度質問できる環境は 1 つ 1 つの介護の手法がより身近になるのではないか。

（5）基礎実習Ⅰ-1 終了後の進路選択

令和 3 年度に基礎実習を履修した学生 25 名のうち、介護福祉士資格を目指した学生は 18 名、全体の 72.0%であった。今年度基礎実習Ⅰ-1 を履修した 29 名のうち、介護福祉士資格取得をめざす学生は 26 名、全体の 89.7%で、17.7%上昇した。

7. 考察

シャドーイングを取り入れた基礎実習Ⅰ-1 を実施したことで、介護福祉士資格取得を目指す学生が前年度に比較して 17.7%高くなったことは、大きな成果であったと考える。その成果に結びついた内容を学生と実習指導者の気づきの中から考察する。

（1） 実習生の気づき

堀（2013）は、「シャドウイングは初学者である看護学生にとって看護師の特徴、特に看護活動のイメージ化を図るという効果が大きい」と述べている。

学生はシャドーイングをとおして「施設の中でも家のように生活をすることを大切にしていて、利用者の気持ちや意見を尊重していた。一人ひとりに丁寧に話をしたり、接していて、楽しいことばかりではないが、『ありがとう』と言われると嬉しい気持ちになった」「指導者の動きを観察することと声かけを意識して聞くことを心がけた。どのような場面でも常に利用者に目を配り、サポートしている姿が印象に残った。」と記述している。学生は、利用者が安心してその人らしく暮らせる環境を指導者が整えていることや、利用者の思いを尊重した姿勢で関わっていること、常に利用者を見守っていることに気付いている。生活環境を整える点については、「歩行介助の際に転倒する危険がないように周囲をよく見ながら、『1、2、3』『1、2、3』と声をかけながら行っていた。」「利用者の方が安全に過ごすことができるように動いていた。例えば、送迎の場面では、利用者の方の体調を車中でも確認していたり、少しの段差でも衝撃を感じないように車いすを浮かせたり、車での乗降の時には、ゆっくりとしたスピードで周囲を確認しながら行っていた。」と、利用者の安全や快適性に配慮しながら支援している様子にも着目している。利用者とコミュニケーションを取るときには、「指導者がコミュニケーションを行う時に、利用者の肩や足に触れながら行うと利用者が嬉しそうにされていた。」「指導者が耳が聞こえにくい利用者に近づき、笑顔で顔を見てから耳元で声をかけると利用者も笑顔になった。」と、介護福祉士の個別に応じた関わりで利用者の笑顔や喜びの感情が引き出されていることに気づいている。

また、「自立支援を意識して介助されていることがわかった。例えば、靴下は向きだけを教えることで利用者が自分で履くことができ、利用者の方のできることをなくさないようにしていることがわかった。」「おやつ介助の際、なかなか食べてくれない利用者の方に『甘くておいしいですよ』『〇〇さんの為に用意しました』と声かけをしながら口元まで運ぶと利用者は自分で箸を持ち換えて食べていた。」「足が冷え気味の方にはクッションや毛布で覆ったり、常温の水を入れたペットボトルを足元に挟む等」との記述から、学生は指導者が利用者のできることとできないことを見極め、利用者が自然にできるように工夫していることや一人ひとりの生活習慣や価値観、選択や決定を尊重しながら必要な支援や言葉がけを考え関

わっていることに気づいている。

他にも、「介護の仕事は様々な業務があることを改めて感じた。入浴介助、排泄介助、食事介助、口腔ケアなど授業で習っただけではイメージができなかったことも、見学、説明を受けることでとても参考になった。利用者の方が安心できるように声かけをすることが大事なことだと感じた。」「自分から利用者に話しかけに行けなかったが、職員の方から説明・見学、助言を受けたことで利用者の方に自分からコミュニケーションをとりに行くことができた。」ことから、介護福祉士の実際の業務内容や利用者との関わりを意図的に観察することで、学内の学びだけではイメージできなかった介護の仕事を理解したり、学生自身が利用者と関わる際のコツを得て実践につなげることができたと考えられる。

日本介護福祉士会では、介護福祉士の専門性を「利用者の生活をより良い方向へ変化させるために、根拠に基づいた介護の実践と共に、環境を整備することができること」と定義している。シャドーイングを通して学生は、利用者との関わりで介護福祉士が「尊厳を守る」こと、「個々の生活習慣・文化や価値観の尊重」、「自己決定を尊重する」こと、「利用者に害となることはせず、安全を守る」こと、「利用者等に対しての節度ある態度やマナー」で関わること、「生活の自立性の拡大を図る」こと、「利用者に生きる喜びと意義を見出せるようにする」こと、「利用者と社会との接触を保つ」こと、「綿密な観察により異常を早期発見」することを実践していることに気づくことができたのではないかと考える。

これまで高齢者や障害者と関わった経験が少ない学生は、学内の講義や演習だけでは具体的な高齢者や障害者に対するかかわり方や支援方法がイメージできにくい。そのため、その状態で施設実習を経験することは、大変なストレスを生じる。しかし、そのような学生もシャドーイングを行うことで、ストレスから解放される。また、ロールモデルである指導者の行動を客観的に観察でき、学内で学んだ知識や技術を頭の中で結びつけることができ、不安が少ない状態で実習に取り組めたのではないか。不安が少ない状態で指導者の行動を意図的に観察し、メモを取ることで、介護の具体的なイメージをもつことに結び付いたと考える。

（2）実習指導者の気づき

シャドーイングについての研修を行ったところ、実習指導者からは、「施設で取り組んでいきたい」という前向きな意見が多く聞かれた。これまでは観察を主とする実習と伝えても、学生に直接的な介護の実施を求める指導者や、見学を指示されて利用者が集うホールや食堂などに留め置かれた学生もいた。しかし、シャドーイングを導入したことで、実習指導者も実習生に対して実際にどのように行動すればよいのか具体的にわかり、ロールモデルとしての役割をイメージしやすかった様子が見てとれる。

また、利用者へ支援を行う毎に学生へ説明をすることと、見学後に学びを確認していくことを心がけ、学生のその時々の意見を聞くことができたことから、指導の成果を実感していたこともわかった。実習生に利用者への支援を説明するには、知識や経験を活用し支援の意味や根拠を考え、学生へ適切に伝えることが求められる。基礎実習Ⅰ-1 の目標に「指導者をとおして介護の仕事の魅力を感じることができる」を設定したことにより、指導者は自分自

身の介護観や介護の魅力の確認を行い、介護の魅力を学生に伝える具体的方法を考える機会になったのではないか。そして、ロールモデルとして「自分の説明が実習生に大きな影響を与える」と実感したことは、指導者のスキルアップにもつながっていくと考えられる。

8. 成果と課題

（1）学生が実習の際に記録した細かく丁寧な記録から、シャドーイングを取り入れたことで、意図的に「見る」視点をもち細かく観察することができ、見学したことや説明を受けたことが学内の学びだけではイメージできなかった介護の仕事の理解につながった。結果、介護福祉士資格取得を目指す学生が前年度より 17.7%高くなった

（2）利用者に支援を行う際に、指導者が説明を行ってから実施し、学生がそれを見学し、見学後に学生の学びを確認するというプロセスを通して、実習生の学びの振り返りが自分の仕事への振り返りとなり、改めて介護の仕事を考える機会となった。

（3）介護福祉士資格取得を目指す学生の割合が高くなった要因をより明確にするために、学生個々の記録内容を再度詳しく分析し、考察を深めていくことが必要である。また、学生と指導者へのアンケートをとり、振り返りの中からの気づきを見出し、今後の指導に役立てることが課題である。

引用文献

一般社団法人日本作業療法士協会養成教育委員会(2022).作業療法臨床実習の手引き（2022）

川延 宗之(2019).介護教育方法の理論の実践　弘文堂

社団法人日本介護福祉士会(2004).現場に役立つ介護福祉士実習の手引き―指導者・教員共通―　環境新聞社

堀 香純・柴田 恵美・田山 友子(2013).基礎看護学実習Ⅰでのシャドウイングによる看護学生の学びの効果　東京医科大学看護専門学校紀要，23(1)，31-36

参考文献

荒木 隆俊・伊藤 和雄・松田 水月(2014).介護福祉士養成に伴う、教育現場と介護現場の役割と連携(1)　羽場学園短期大学紀要，9(4)，425-432

細川 真理子・小塚 美加(2018).逆シャドーイングを受けた新人看護師の気づきと今後の指導方法の検討　静岡赤十字病院研究報，38(1)，76-79

村川 由加理・作田 裕美・長井 春歌ら (2019).救命救急センターにおけるシャドウイング教育後の新人看護師の気づき　日本救急看護学会雑誌，22，1-9

松浦 麻子(2022).看護基礎教育におけるシャドーイングに関する文献検討　東邦大学健康科学ジャーナル，5，23-32

佐居 由美・大久保 暢子・石本 亜希子ら(2008).看護学導入プログラムにおけるシャドーイングアドバンスの試み　聖路加看護大学紀要，34，3，70-78

清水 曉美・荒井 葉子(2008).基礎看護学実習Ⅰで学生が学んだ看護師の役割　看護学教育学会学術集会

谷 多江子・宮林 郁子・安藤 満代ら (2015).精神科看護師にとっての実習におけるシャドウイングの体験　日本看護学教育学会誌，25，(1)，51-58

渡邉 郁子・塚原 節子(2010).看護基礎教育でのシャドウイング実習実施により得られた看護学生の学び　日本看護研究学会雑誌，33，(3)